

家庭

待ちくたびれた。喜びがはじける



ジョリータ・バリーさん(40)の両手は宙に浮いていた。仕事で汚れた手で、わが子に触れたくないのだろう。ずっと、中途半端な姿勢で娘を抱きかかえている。そんなお母さんにお構いなく、ネーミヤ(4)はべったりと甘え続ける。

今年2月、フィリピンのスモーキーバレーで、この母子に出会った。ネーミヤはというと、一人遊びをしている間に、体中泥だらけ。今さら汚れた手を気にすることもないのに、バリーさんは気を使う。

「もうひとり、ダルウィンという6歳の息子がいるの。ここで働き始めて12年が過ぎた。稼ぎ? 1日働いて、95ペソ(250円弱)くらいね」



宇田 有三

ネーミヤは寂しかったのだろう。私と話をしている間も、母親にまとわりつく。そんな娘に手を焼きながら、バリーさんは小声で身

の上話を続けた。

「だんなさんは?」

「出て行ったきり……」

「どうして?」

バリーさんは口をつぐんだ。初対面の人にとどこまで立ち入っているのか、いつも考えさせられる。

この9年間、六つの国のごみ捨て場を訪れた。そこで、「変わらない風景」を見てきた。例えば数年後、この母と子の生活は改善されているだろうか。おそらく「ノー」だ。

外からの訪問者は、まずその場の厳しい現実、次いで人間同士の温かいふれ合いに、目を奪われる。しかし、「変わらない」のは仕方ないと傍観者になることは、事態を悪くすることに手を貸すことである。ようやく、今になって気づいた。

＝おわり

(フォトジャーナリスト)

ごみ捨て場の変わらない現実